

わたしの雪彦山

あい子は、家から遠くに見えるその山を、小さいころから不思議な山だと思っていました。てっぺんの方は、岩でこつこつしていて、何かこわいようにも感じていました。

「あそここの山は、山ぶしたちがこもってしゅ行をする」と、おじいちゃんが言ったことがありました。それからあい子は、きつと近づいてはいけない山なんだと思っていたのです。

ある日、おじいちゃんが、

「あい子、今度の休みの日に雪彦山に行ってみよか。きれいな花や草がぎょうさん見られるで」と、話しかけてきました。

「でも、そこは山ぶしさんしか行ったらあかんのやろっ」

「何を言つとるんや。」

おじいちゃんは、にっこり笑ってあい子のとなりにすわり、話してくれました。

「雪彦山はな、岩が角みたいにとんがつとるやろ。めずらしいから日本百景にも選ばれとるんやで。昔の人は、神様があるように見えたんやろな。それで、山ぶしがしゅ行するようになったんや。」

「でも、岩山みたいやけど、花がさいてるの？」

「おお、そりゃ行ってみたらわかるわ。」

「あつ、あそこにピンク色の花がさいてる！」

休みの日に、あい子はおじいちゃんと雪彦山へやってきました。近くまでくると、思っていたよりも高い山だとわかりました。岩がつき出たようなちょう上もよく見えます。あい子はおじいちゃんと登山道を歩いていました。

「アケボノツツジやな。山に春がきたと教えてくれる花や。」

「おじいちゃん、こつちの木はえだが三本に分かれてるよ。」

「それは、ミツマタ言つんや。その木から和紙ができるんや。」

家でもたくさん草花を育てているおじいちゃんは、植物のことは何でも知っています。あい子に教えてくれるときは、とても生き生きとした顔をしています。

「これはオチフジやな。」

おじいちゃんは、地面にはり付くように咲いている小さくてかわいい花を描差して言いました。「かわいい。これ、お母さんに見せたい。」

あい子はその小さな花に手をのびした時でした。

「あかん！」

おじいちゃんの大きな声がありました。

「あかん、あい子。取ったらあかん。」

あい子はびっくりして手を止め、おじいちゃんの方をふり向きました。

「ええか、自然に生えているものは取ったらあかん。このオチフジは、この辺りで見られん

花なんや。オチフジだけやない。この山にやってくる人が、いろいろな草花を、めずらしいと
いって根っこからぬいて持って行ってしまふことが、よくあるんや。だから、どんだん花の種
類も少のうなっしてしまた。」

おじいちゃんはさみしそうな顔をして、そう言いました。
「ごめんなさい。」

あい子は立ち上がりながら、小さな声であやまりました。

おじいちゃんとあい子は、また道を歩き出しました。

「ホーホケキョ。」

「キツチヨ、キツチヨ、ビビビ、ビビビビビ……。」

鳥の鳴き声がありません。

「おっ、ウグイスとミソサザイが鳴いとるな。鳥もたくさんあるぞ。それに、この山には、シカ、
クマ、タヌキ、ウサギ、サルもあるんや。花だけやない、生き物がたくさんあるんや。」

おじいちゃんが空を見上げました。小さな鳥が木から飛び立っていきました。

あい子も、青い空を見上げ、鳥の声を聞きながら、大きく息をすってみました。これが自然の
においなんだと思いました。

「でもな、わしらが子どもころは、もっともっというろいな草木がしげとってな、動物たち
もぎょうさんおったんや。山に食べ物がたくさんあったからやるな。今では、すっかりへっ
しもたがな。」

おじいちゃんが、昔のことをなつかしそうに言いました。

あい子は、シカやウサギやタヌキが、山を走り回る様子を思いつかべました。

たくさん草花、鳥の鳴き声、そしてどこかにいる動物たち……。あい子にとっては、やはり
雪彦山は自然がいっぱいあった山だと思いました。

「わたしが大きくなって、花も木も鳥も動物もたくさんいる今のままの山にしたいな。」

「おお、よう言った。そっや、あい子たちが守ってくれへんと、生き物たちがくらせへん山にな
っしてしまうからな。」

おじいちゃんはそう言って、うつすらとうかんだひたいのあせをタオルでふきました。

あい子は、おじいちゃんが見上げている山のとっぺんをいっしょに見上げました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。

本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。